



土木紀行

魅力満載「識名園」

沖縄県那覇市

沖縄は、かつて「琉球王国」という不^ふ羈^き独立の国として、独自の歴史を歩み、特有の文化を育んできました。

沖縄の文化は、日本、中国、韓国、東南アジア諸国などとの交易を通して、それぞれの利点をかみ砕き、自らの文化として再構築しました。それを人呼んで「チャンプルー文化」といいます。「チャンプルー」とは、いろいろなものを合わせた炒め物をいいますが、沖縄のシマ（島）豆腐が入らなければなりません。ですから、シマ＝沖縄をベースとして、さまざまな具材を上手く融合して創り上げたといえましょう。

そのことは、庭園文化にも当てはまります。中国庭園、日本庭園、韓国庭園などのエッセンスを取り入れ、随所に散りばめながら琉球庭園を創り上げました。いわゆる琉球庭園の歴史は、史資料から確認できる限りでは、15世紀辺りからです。

今日確認できるのは、1427年に竣工した「安国^{あんこく}山（沖縄県指定史跡『龍潭^{りゅうたん}およびその周辺』）」

（那覇市首里真和志^{まわしちよう}町）です。龍の頭を模した池を掘り、周囲に樹花木などを植えて整備したことが記録に見えます。

また、この時代から建立された寺院に庭園が備えられており、首里城内にも存在していたことが知られています。

18世紀に至ると、琉球庭園は全盛期を迎え、士族層に広く浸透していき、宮古、八重山、久米島などの離島にも普及していきます。

そのような背景を踏まえ、世界遺産・特別名勝「識名園」が登場するに至るのです。

「識名園」は、尚温王^{しょうおんおう}の冊封に当たり、中国皇帝の使者である冊封使を歓待するため、1799年につくられました。冊封とは、平たくいえば、新たに即位する琉球国王を中国皇帝が認めるという儀式です。当時は、冊封を受けなければ、中国との外交は認められていませんでした。

主要な儀式は首里城で行われましたが、「識名園」では、国王がプライベートに冊封使を歓待し



写真—1 御殿遠景



写真一2
個性的な石畳道

ました。

さて、「識名園」は、草書体の「心」の字を象った池を中心に構成された廻遊式庭園で、日本庭園をベースに、中国的な要素と、琉球の趣向を巧みに組み合わせてつくられています。その指定面積は、41,997m²です。

正門は、「ヤージョウ（屋門）」と呼ばれる赤瓦葺きの四脚門で、そこからS字状に伸びる石畳を進みます。左右の視界が樹木で遮られ、俗世を離れ、やがて眼前に美しい池が現れます。そして、水源の一つである「育徳泉」のたおやかな曲線で構成された石積を見ながら、御殿へと向かいます。ここでもう一度視界が遮られ、自然の岩盤のように積まれた中国風の石垣の間を歩いてゆきます。

御殿は、赤瓦で葺かれ、外柱は、チャーギ（楨）を自然のままに使い、鄙びた風情を醸しています。御殿一番座から眺めると、中国風の「六



写真一3 育徳泉



写真一4 六角堂



写真一5 小石橋と大石橋

かくどう角堂」、整然と組み立てられた「大石橋」とそこから伸びる堤、自然石で構成された「小石橋」、さらに南の築山などが目に入ります。そこに爽やかな風が池の水面を渡り、なお一層五感のすべてをくすぐります。

御殿を出て、「小石橋」を渡り、中島に立って東側を眺めると、池があたかも川であり、その上流を見ているような錯覚に陥ります。御殿の一番座から臨めば、その流れは左手から右手へ向かうようにつくられており、そのことが日本庭園をベースとしている証です。

「大石橋」を渡り南の築山に登ると、対岸の御殿をはじめ主な景色を一望することができます。

歩を進めると、琉球の人々が好んだ曲線と曲線を組み合わせた「舟揚場」があり、さらに進むと「勸耕台」に至ります。ここから眺めると、不思議なことに海がまったく見えません。存外に琉球の国土が広いのだと、中国の冊封使たちにアピールしたのだといひます。

「識名園」の見どころはまだありますが、どうぞ続きは、現地でお楽しみください。